六時終演。（第一部）弁財天ー三美会会員一同▼伽羅の兜ー日下部▼パンタちゃんー林▼赤垣源蔵ー斉藤良子、同美保子▼一寸法師ー西田▼実盛ー田中▼桃太郎ー西田▼一筋後川ー大沢▼加藤清正ー宮田旭鶴▼花の白虎隊ー吉田▼禅師と正宗ー斉藤旭晃、西村旭富▼源実朝ー谷口旭芙▼土ぐもー一坊寺旭清▼安宅の関ー角田旭優▼西郷隆盛ー田中鵬水▼巌流島の戦ー菅旭香▼壇の浦秘曲ー来賓・林旭竜▼城山ー来賓・平井春嶺。（第二部）石田三成ー秋▼那須与市ー景山▼小督ー田中▼羅生門ー片山旭星▼茶臼山ー永井旭美▼小栗橋ー篠原旭洋▼筑後川ー菅旭耀▼羅生門ー細川旭穂▼曲垣平九郎ー吉田旭晶▼青葉の笛ー吉田旭礼▼都落ちー桜井旭冨▼小栗栖ー内藤旭波▼鴨川の露ー矢吹旭美津▼大楠公ー来賓・伊佐地旭勢▼戦艦大和ー来賓・渡島旭鶯。

京都琵琶協会の八月例会

八月十日(日)昼平井春嶺会長宅。（次号詳報）

筑前琵琶演奏大会

八月十七日(日)昼東京日本橋第一証券ホール、主催東京旭会。演奏曲目十六曲。（次号詳報）

鶴絃会演奏会

八月十七日(日)昼浜松市東部自治連合会館、主催小野鶴彦氏。（次号詳報）

三浦蓮水会ゆかた会

八月二十四日(日)昼三浦蓮水女史宅（次号詳報）

薩摩琵琶正絃会演奏会

八月三十一日(日)昼東京日本橋第一証券ホール、創立二十周年記念演奏会。（次号詳報）

ラジオ琵琶放送

八月二日(土)午後六時NHK・FM。「堅田落」鶴田錦史、「湖水渡り」原島旭粧両女史。

転居

○…高橋蘇水氏 〒042 函館市湯川町三ー七ー一五

○…三浦蓮水氏 〒662 西宮市羽衣町七番一九号。（一水会神戸支部も同右）。

―予告―

○…松井灯水師追悼近県琵琶親善演奏会 九月七日(日)正午秋田市大町三丁目協働社大町ビル、主催一水会秋田支部。来賓出演一水会本部会長中谷襄水、同理事座間鮫水両氏。

○…堺開口神社秋季大祭に琵琶献奏 九月七日(日)昼一時、大阪琵琶同好会協賛多数献奏。

○…京都琵琶協会九月例会 九月十五日(休)（敬老の日）昼一時、平井春嶺会長宅。

○…邦楽琵琶祭り木原綾子演奏会 九月二十三日(祭)東京茅場町証券ホール。

○…薩摩琵琶一泊弾交会 九月二十八・九日(日)(月)静岡県弁天島浜名荘、主宰小野鶴彦氏。

○…秋声会琵琶演奏会 十月五日(日)正午名古屋市大須中小企業会館、主催名古屋秋声会。

○…第十七回琵琶コンクール 十月十二日(日)昼東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。

○…筑前琵琶橘会全国大会 十月十二日(日)名古屋中部電力ホール。

○…筑前琵琶旭会第五十回全国大会 十月十八・九両日(土)(日)福岡市少年文化会館。

○…錦心流琵琶演奏会 十月二十六日(日)正午大阪府立婦人会館、主催一水会大阪支部。

○…錦心流琵琶一水会全国大会 十一月十五日(土)十時ー二十時東京銀座ガスホール。

○…各流派琵琶合同秋季演奏会 十一月二十四日(月)（振替休日）正午京都安井金比羅宮会館、主催京都琵琶協会。

あとがき

梅雨あけの宣言があって三十四、五度という二・三日間の酷暑に汗を流したが、そのあと戻り梅雨とかで七月末から八月上旬にかけて降りみ降らずみの低温の毎日が続き今年の夏はどうなるのかと案じられるが、結局は我々人間の力ではどうにもならない●日本列島は長雨と低温、中国やベトナムは旱ばつ、アメリカの熱波など世界的の異常気象で、もしかしたら地球も終りになるのではあるまいかと取越苦労をする人も居る●本号に掲載の「感謝感激」の手紙は、ただ一回の演奏会でこんなにも感激された琵琶ファンが居られるというのは誠に嬉しい限りで本紙七月号〝予告欄〟が極めて有意義であったことが証明される●いつもお願いしている通り各地で催される公開演奏会などの予告はプログラム又は催しの内容を出来るだけ早く且つ詳細にお知らせ下さって琵琶愛好の方々に報道することにしたい●本紙は毎月五日までに翌月号掲載内容の構想を練り上げて編集に取りかかり、十日に締め切って十二日に印刷に廻し、校正を経て二十五日までに完成して翌月一日号の発送を原則としているので、これに間に合うようにご連絡下さるよう是非お願いする●兎に角毎号の〝予告欄〟を精々豊富また正確な内容にして皆様に喜んで頂けるものにしたいのが筆者の念願である。御協力よろしくお願い申し上げる。

昭和五十五年九月一日発行（非売品）
編集者 植村寛水
発行所 京紘社
〒569 高槻市津之江北町一一ノ二三
電話 〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶機関紙 京紘 第三一五号 京紘社

建武の中興と吉野五十七年（四）

ばくすい

早くもこれを察知したのは大塔宮で、かねてより全国に号令していた宮は、足利高氏の動勢に不審を抱き、高氏を除くために六月初め天皇京都還行の後も、宮は大和信貴山に拠って兵を集められたが、朝廷の方針としてこれを禁止されると共に、大塔宮を征夷大将軍に任じたので一応無事に終った。

翌建武元年六月、宮は再び高氏討伐を企画して新田義貞、楠木正成、名和長年らと協議に入ったので、天皇もその処置に困って宮を鎌倉へ流された。翌年七月、北條高時の子時行が信濃で挙兵して鎌倉に討ち入り、足利直義はこれと戦って敗れ鎌倉を放棄したが、この混乱に紛れて大塔宮を殺害したのは、足利幕府を建てるのに宮が第一の邪魔になったからである。

高氏は当時京都に在ったが、北條時行討伐のためと称して征夷大将軍の任命を願い出た。しかし朝廷はこれを許されなかった。けれども高氏は勅許を待たずに出発して鎌倉を奪還し、自ら征夷将軍と号して、新田義貞と一戦するために兵を整えた。そこで朝廷は、義貞に大軍を授けて鎌倉に向わしめたが、十二月十二日、箱根・竹の下の戦いに大友が反逆して足利方となったため、官軍は敗れて京に還り、之を追撃して足利勢は京を占領したが、官軍の諸将が協力してこれを討つに及び、足利は急遽九州へ逃げのびた。

九州では菊池武敏がこれを迎え討った。武敏は、かつて正成が第一等の功績と推賞した菊池武時の子で、高氏都落ちの報に接して之を迎撃する準備をし、延元元年二月太宰府を占領し、少弐の根拠有智山城を陥れ、三月二日多々良港に於いて高氏と決戦した。最初は足利方頗る不利で、高氏は切腹を思い立ったが、地勢と風向きが官軍に不利であったために武敏は退却の余儀なきに至った。

菊地勢が敗れ、高氏は島津、大友、少弐らの大軍を率いて再び京に向った。官軍はこれを摂津に迎え討ったが、義貞は敗れて京に帰り、正成は無念にも湊川で戦死した。延元元年五月二十五日であった。天皇は比叡山に移られ、義貞は皇太子恒長親王を奉じて越前へ下り再挙を図るとともに、天皇は吉野山へ隠れられた。

後醍醐天皇が隠岐の島から京へ帰られたのは元弘三年六月、翌年が建武元年で、次ぎが建武二年、その翌年が延元元年でその五月に正成が戦死し、同年十二月天皇が吉野へ移られたのであるから、「建武の中興」と云っても極めて短かい間であって、中興が出来てから足利が謀反したのではなく、中興と同時に高氏は謀反を起こしたのである。

建武の中興は脆くも崩れ去った。正中の変から十年間の辛苦、多くの犠牲を出して漸く鎌倉幕府を倒した途端に足利高氏の謀反となり、承久の昔に劣らぬ悲劇を迎えた。後醍醐天皇が延元元年に吉野へ登られたあと、後村上天皇、長慶天皇、後亀山天皇と続くが、後亀山天皇が京へ帰られたのは元中九年（一三九二）冬で、此の間五十七年、天皇四代にわたって都を離れ、山の中の侘しい行在所に年月を送られたのである。

単に吉野時代といっても、桜の名所蔵王堂に終始安定した生活を送られたのではなく、楠木正行が守護している内は兎も角、正行戦死と同時に高氏軍の高師直（こうのもろなお）

によって行在所は焼かれ、穴生、金剛寺、観心寺から摂津住吉、大和小島の栄山寺へと、次ぎ次ぎに移られた。後醍醐帝の御歌 ―

ここにても　雲井の桜咲きにけり
ただかりそめの　宿と思ふに
都だに　寂しかりしを　雲晴れぬ
吉野の奥の　さみだれの頃

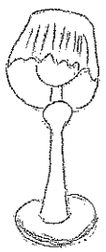
吉野の行在所が高師直のために焼かれた翌年の春、後村上天皇の御母后がその跡をたづねて左の通り詠まれた。

み吉野は　見しにもあらず荒れにけり
あだなる花は　なほ残れども

帝の還行については、高氏申し出のままに三種の神器を渡して足利の幕府を承認されたら、足利は喜んでお迎えしたのであるが、それは暴力に屈し、反逆を認める結果となり、また永久以来の多くの忠臣を犬死にさせる事となるので、天皇は苦労に耐えながら之れを許されなかった。

天皇の遺勅につき太平記には「朝敵を悉く亡ぼして四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。朕即ち早世の後は、第七の宮（後村上天皇）を天子の位に即け奉りて、賢子忠臣、事を謀り、義貞・義助が忠功を賞して、子孫不義の行い無くば、股肱の臣として天下を鎮むべし。之を思ふ故に、玉骨はたとへ南山の苔に埋もるとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を軽んぜば、君も継體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらじ」。とある。

即ち天皇は、無道不義との妥協を許されなかった。新田、楠木、名和、菊池を見捨てて足利と手を握ってはならぬと云われたのである。この決然たる態度のために四代五十七年間、吉野の山中に佗しい月日を送られた事は、日本の歴史を回顧する上に最も重要な点であろう。



壮烈肉弾飛ぶ日露戦役

旅順攻囲戦と将軍乃木希典

辻　旭城

大東亜戦前までは、乃木将軍の人徳は庶民たちに燃え立って敬慕する者も、年を経るごとに多くなってきた。当時琵琶をはじめ浪曲、映画などに〝乃木さんもの〟が流行し、どこの会場でも人気を呼んでいた。

旅順攻囲戦を執筆するにあたり、まづ乃木将軍の家系から述べねばならぬ。乃木家は宇田源氏に属する家柄で、文献によると宇多天皇の皇子敦実親王の子、雅信に始まる宇多源氏の裔と称し、近江の国佐々木庄に住みついて佐々木氏を名乗り、近江源氏と呼ばれていた。秀義のとき鎌倉幕府を開くべく、保元、平治の乱を起こしたが、武運つたなく敗れた。秀義はじめ子の定綱、盛綱、高綱らは、相模へ流浪して平家打倒を画策するうち、頼朝を援けて文治元年（一一八五）壇の浦の合戦に平家を滅亡させ、建久三年頼朝は鎌倉に幕府を開くに至った。

幕府の創立にあたり、それぞれ重臣に厚い恩賞があり、佐々木四郎高綱は備前、安芸、周防、因幡、日向、伯耆、出雲の七ケ国守に任ぜられた。然るに高綱は故あって遁世し、紀州高野山に入った。そのため高綱の次男次郎左衛門尉光綱が任地出雲の国に赴き、八束郡野木邑に住んだ。その縁故から始めて乃木姓を名乗った。これが乃木家の始祖である。

さて、明治三十七年二月、満洲の撤兵問題から遂に日露両国は戦戈を交えることになり、乃木希典は留守近衛師団長に補せられ、戦時下にあって軍務多忙をきわめ国防に専念するうち、五月二日第三軍司令官に任ぜられた。

日露戦争は次第に激しくなり戦域も拡大されてきた。長男の勝典は歩兵第一聯隊付きの中尉として奥大将の第二軍に編入されて、四月十六日東京を出発し出征の途についた。また次男保典も留守第一師団第二聯隊付の少尉で、これも近く出征することになり、これで乃木一家は三人とも戦線に立つことになった。希典は「三人が戦線に出るのだから、誰が先きに死ぬかも知れん、葬式を一つずつ出してはいかん、棺桶が三ツ揃うまで待て。」と云い遣し、五月二十七日東京を出発して、途中佐々木神社ゆかりの近江安土を、翌二十八日の午後通過することになっていたので、氏子たちは神社に通ずる道路に神灯の高張りを建

てて見送り、将軍を喜こばせた。

下関から御用船八幡丸に乗船した将軍以下の将兵は士気大いに高揚し、六月六日恙なく大連湾の塩太港に投錨した。

上陸した乃木大将に待ち構えているもの、それは実に将軍最後の日露戦奮闘である。日本帝国の興亡は敵を懐滅するにあり、史上を飾る壮烈無比の旅順攻囲戦の序幕は、大将によって開かれた。

旅順攻囲戦は戦史上未曽有の大激戦で且つ難戦であった。出陣した長男勝典は、金州の激戦に名誉の戦死を遂げ、それから十日あまりの後、次男保典も爾霊山で戦死した。

この悲報に接した幕僚は、司令官室を訪ねて「閣下、このたび二人のご子息を同時に亡くされて、さぞお淋しいことでしょう。」と慰めると、将軍は毫も愁傷の色をあらわさず、「これで世間の人に申訳がたつ、私は不束な二人の愚息ながら、皇国のお役に立ったことを嬉しく思う。」この話を聞いた多くの将兵は、大将の赤誠に感激した。玉木大尉は筆をとり〝一人息子と泣いては済まぬ、二人亡くした方もある。〟と書いたという。

二人の息子を亡くされた将軍は、いつも夕方になると第一線を巡察された。幕僚たちは心配して「第一線へは出ないようにして下さい。」とたびたび進言したが聞き入れられず、叢のあちこちに倒れている多数の部下負傷兵一人一人に「よくやってくれた、担架が来るから早くよくなってくれよ」と慰問して歩いた。また、将軍から渡された恩賜の煙草を吸った負傷兵は、涙を流しながら将軍を仰ぎ見ると、将軍の眼には早くも露が光っていた。

かくて、慈悲深く忠勇無比の将軍の下に、第三軍の精鋭勇士は協同戮力、敵陣に突入するや、江河の決するが如く、また山嶽の崩るるが如く猛然驀進し、数千万発の銃砲弾を旅順要塞目がけて発砲しつつ突撃を繰返したが、露軍は機関銃その他の新兵器によって抵抗し、肉弾また肉弾、実に二百四十余日にわたり一日として攻撃を休むことなく、死屍は積んで山をなし、鮮血は流れて河となったが不撓不屈、嶮岨を乗り越えて攻め戦った。そして、難攻不落と露軍が豪語したさしもの堅るいも遂に白旗を樹て、敵将ステッセル将軍は自ら出でて、我が軍門に降を乞うに至った。日本戦史を飾る一ページで、乃木希典大将こそ実に稀代の偉勲者というべきである。

旅順の陥落によって日露戦争の勝敗は、事実上決したというべきで、第三軍は引続き北進して奉天大激戦に参加し功をたてた。

皇師百万征強虜　野戦攻城作山屍
愧我何顔看父老　凱歌今日幾人還

やがて平和条約の調印も終り、明治三十九年十月十四日東京に凱旋した将軍は、この詩を陸軍大臣に手渡したのであるが、自らは我が二愛息の戦死を歎かずに、部下の犠牲者の遺族を悼んだもので、本稿起草にあたり、将軍の心情を察して断腸の念禁じ得ないものがあった。

その後、明治大帝の崩御に際して、乃木夫妻が殉死したのは衆知の通りで、筆者は国民の一人として心から冥福を祈るものである。

五絃閑話

水藤五郎

生きた芸

今日、そして今後、琵琶は生きた芸術として存在できるのであろうか。芸術は、それ自体は存在し得るのであろうが、社会の中にあって、常に生きた芸術、芸能としてあることは出来ないであろう。或る時期は、生きた芸として、人々に感動、感銘を与え、人々からは芸能として生きつづける栄養を与えられるのである。その反面、休む時期、若しくは、消滅してゆく時がある。琵琶はどの時期なのか、これを自覚していないと、芸の道を徒らに誤まらせ、その道にある人々に困難を強いることになる。

火山で云えば、富士山か、浅間山か、そして今日も活動している阿蘇山かの区別であろう。芸は人に感動を与えなければならないのだから、琵琶を聴いた人が、心の底から感動するのなら、琵琶は生きた芸能なのである。

古典芸能の分野で、今日、生きた芸能であるのは何でありましょうか。浪曲と講談は、琵琶と可なり近い存在であると解せる。その内容も、演ずる心も近いのである。そして、その三つの分野共々、今日低迷の境にある。

浪曲は、講談、琵琶以上に、広い支持層を持ってきた。自他共に認める大衆芸能の王者であった。が、今日、浪曲は生きた芸能から休止の芸能になってしまった感がある。講談については云う必要はないであろう。則ち、琵琶と同様に講談定席は不入りであって、その語る歴史の尊さは理解しても、それを聴く人々は少ないのである。

こう考えて来ると、琵琶が盛んになるのを願うのが不思議なのであって、浪曲、講談、そして琵琶は休みの芸能になるのである。

浪曲作詞家のK氏は、東京新聞のインタビューの中で、十年前、二十年前の発想で、今日の客席をうならせようとすることが無理なのだ、浪曲の低迷は、浪曲家の怠慢にある〃と云っている。頷づける点の多い意見である。

浪曲が往時の如くに、大衆の中に生きる為めには、大衆の求めている何かをそこに出すことであろう。

浪曲家がやゝもすれば、浪曲に没していて、その語りの内容に注意を怠っていた。大衆の求めるのは、常に、明快性である。判る〃ことである。それを示すのに、今なお、広沢虎造への人気が衰えぬことである。虎造の浪曲は、判り易さであった。

今後の琵琶についても同じであろう。判る〃ことが第一である。

琵琶は〃語り物音楽〃でありながら琵琶歌が主であった。近世琵琶楽と云われるさつま琵琶、ちくぜん琵琶の双方共がそうであった。それ故に、語るのでなくて、歌うのであった。うたを歌うのであれば、歌もの音楽である。他の分野に対抗は出来ないことになる。

無意味な程に、歌的な奏法に流れてしまったこの近代琵琶楽は、今、滅びる運命にあるのは当然であるかも知れない。

言葉の一語一語に節がついてゆくのだから、当然、意味が稀薄になる。〃怒るや竜王これにありを〃イカァールウヤァー、リュウオウ、コレニィーアリィ〃と云う崩れを歌う人が大多数であった処の今日迄の状況は、猛省されなければ、浪曲、講談を蹴落として、判る〃芸能となることは出来ない。〃イカルヤ、リュオウ、コレニアリィー〃と明確に言い切る発想が今後要求されるのであろう。

この点錦心流の今日、そして今後は琵琶の指標でもある。錦心流を広く大衆に知らしめることに成功した錦心師の言葉として広く知られているのに、「自分は楽器がなくても大丈夫、扇子ででも歌える」との一言がある。これは如何なることか。錦心師の芸が〃語りうた〃であったことを示していると思えるのだが、果たしてどうであろうか、語る心で歌っているのであるからこそ、講談の如く、義太夫の如く、単一な音、間取りの撓音だけでも良いと述べたのであろう。

錦心師の絃の特徴である〃バターン　テンバターン〃は、この意味での叩音であった。が、錦心師没後その枝葉は栄え繁ったが、その栄えに伴って、語る歌から、うたう歌に変っていった。錦心流の為めの歌であった。つまり、声節を聞いて客席は酔い、奏者もそれに心血を注いだ。その意味で、錦心師亡き後、錦心流の節調は完成していった。そして、歌が流麗になればなる程、錦心流節調的になればなる程、バターン　テン　バターンの開放絃が奇異に思えるようになってきた。うた語りであるのに、その伴奏は講談の〃ハリオオギ〃と相似た発想であったからである。敢えて附言するこの論理は、錦心流を理解するのに、このバターン　テン　バターンが一つの障害になるのだと云う大衆の意見に基づいていることを確信するからである。その裏付けとして、錦心師のレコードを聞く時、あの叩音奏法が全く気にならないことでも判る。一の絃と三の絃の打音の音質の良し悪しでなく、その打法の巧拙でなく、語る心で打つ音である師の音は、あの講談の釈台を打つ音の響きに似て、千差万別の趣きがあるのである。

（終）

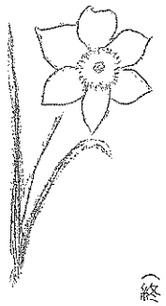
翠琵琶宗家
竹下翠風
〒194-01
東京都町田市金井町二六一三ノ三八
電話〇四二七(三四)一一八八番

残暑御見舞

高橋蘇水
〒040 営業所 函館市大手町一六ノ一〇 電話(二三)四一五六番
〒042 居宅 函館市湯川町三丁七一一五 電話(五九)二四五三番

詩吟・和歌朗詠考（一）

編集部



前号〃あとがき〃欄で予告した通り、琵琶演奏の中に入れる詩吟や和歌朗詠は、琵琶歌自体を引き立てるばかりでなく、演奏気分を新たにし、琵琶歌の硬軟それぞれの内容をひとしお露呈する役目を演じて、聴衆を喜ばせる結果となるとも考えられるが、その詩、その和歌の真の意味を演者が熟知して置かねば却って逆効果となる恐れもあるので、今後数回に亘って作者の名とその心境、字句の解説と内容の説明を略述したい。御参考の一助ともならば望外の喜びである。

（琵琶歌――桜狩）

桜花の詩　作者逸名

薄命能く伸ぶ旬日の寿（じゅ）　納言（なごん）の姓字此の花を冒す　零丁宿を借る平の忠度　吟詠風を怨（うら）む源の義家　滋賀の浦は荒れて暖雲飜（ひるがえ）り　奈良の都は古りて紅霞簇（むらがる）　南朝の天子今何（いづこ）にか在（おわしま）す　芳山を望まんと欲せば路（みち）更に眸（はるか）なり。

桜花に関する故事を取り入れた有名な詩で、吟声としても感傷的に、情味まことに豊かなものである。

（註釈）　薄命＝命の短かいこと。旬日＝十日。納言＝少納言、中納言等昔の官命。零丁＝落ちぶれる。暖雪＝春の雪、ここでは落花の意。紅霞＝桜花。芳山＝吉野山。

（大意）　初めの句は藤原成憲が桜花を愛し桜の木を庭に植えて、花の散るのを楽しんだという故事があり、「桜町中納言」の官

日本旭会舞鶴琵琶協会
事務所
高橋旭洋
〒625 舞鶴市朝日通五條東入
電話〇七七三(六四)〇五一八番

残暑御見舞

京絃主幹
植村寞水
錦心流琵琶一水会
京都琵琶協会
日本琵琶楽協会

位を賜った。次ぎに平忠度の作歌に〝行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじなるらん〟とあり、源義家は勿来の関で〝吹く風をなこその関と思えども、道も脊に散る山桜かな〟と詠み、千載集に平忠度は〝ささ波や滋賀の都は荒れにしを、昔ながらの山桜かな〟とある。また古今集には伊勢の大輔が〝いにしえの奈良の都の八重桜、今日九重に匂いぬるかな〟と詠んでいる。滋賀の都も奈良の都も共に桜で名高いが、桜花の美は歴史的には吉野山が最上である。しかしながら南朝の天子（後醍醐帝をはじめ四代の天皇の御霊の意）は今何処に在しますことか、吉野山は余りにも遠い、けれどもこの遠い山路を分け入って南朝の哀史をさぐり、また桜花の美に浸りたいとの感概を詠じたものである。

（琵琶歌――母常盤）

常盤抱孤図　梁川星巌

雪は笠檐（りうえん）を圧して風袂を捲く
孤々乳を覓（もと）む若為（いかん）の情
ぞ　他年鉄拐（てつかい）峰頭の嶮　三軍
を叱咤するは是れ此の声。

作者は美濃の人、玉地吟社を建つ、安政五年歿、齢七十。

（註釈）　笠檐＝市女笠のへり。孤々＝赤ん坊の泣く声。若為の情ぞ＝どうすればよかろう何という哀れな様よ。他年＝後の年。鉄拐峰頭の嶮＝鵯越えの嶮。叱咤＝号令。

（大意）　市女笠に壷装束の常盤御前が、今若、乙若、牛若の三児をつれて逃げまどう。雪は笠の檐りに降り注ぎ風は袂を巻き上げる。懐に孤々と乳を求めて泣く牛若の声、何と哀れなことよ、後年平家を一の谷に攻め、鉄拐山頂から鵯越えの嶮に於て、大軍に号令し壇の浦で平家を亡ぼしたその声は、即ちこの孤々と泣いた牛若（義経）の同じ声である。

感謝感激

東京都葛飾区　塚本勇治

：先日、京絃社発行琵琶機関紙御掲載の「予告」を拝見、ものがたり琵琶杉山旗水先生の演奏会、七月十二日発明会館に出向き各流派の先生方の演奏を聞き感動致しました。ただ素晴らしいの一言に尽きます。御紙を拝見して居なかったらこの演奏会も聞くことが出来なかった。貴社に対し厚くお礼申し上げます。私も東京に来てから琵琶を聴く機会に恵まれず、最近は四月京都で梅原さんの演奏会を聞いただけで、琵琶を聴きたくてたまらない矢先きに御紙を拝見して知った次第です。

杉山先生の演奏は始めてでしたが〝会津の華〟は会津の娘子の壮烈を最期や、武士の奥方の生き方などを聞いている私達、周囲の人達からも咽んで居る声が聞こえて来ました。約四百人の聴衆からの万雷の拍手は、いつまでも、いつまでも止みませんでした。今まで京都でも度々聴きに行きましたが、さすがに中央だなあと思いました、席は四百だそうで空席は一つもなく、後方で一杯立っている状態です。また、どの出演者一人一人をみても素晴らしい人ばかり、それぞれ名の有るお方だと思います。

特に鈴木流泉先生の弾法、また友吉、山下、若水、中谷、どれも甲乙つけがたい。一人一人の演奏者が舞台に上る毎に掛声拍手、今までの琵琶会に無い凄い熱気で、会場は声援の渦で出演者も懸命に熱演され、私も生まれて始めての経験で大盛況でした。

都、木原、座間三先生の演奏も批評の出来ない素晴らしさ、殊に何と云っても〝修善寺物語〟、劇と琵琶が一体となって視聴客を完全に魅了し、杉山先生の御熱演にはただただ感激致しました。

素晴らしい琵琶演奏会は、一日過ぎた現在でも余韻が残り、本当に貴社に対し厚く御礼申し上げます。七月十四日。（原文のまま）。

寸言（45）

佐久間象山

幕末の勤皇家で海防論者。吉田松陰は象山の弟子であるが、元治元年京都木屋町で壊夷派の士に刺されて果てたのが七月十一日のこと。今も現地にその碑が残っている。

名古屋秋声会のゆかた会

七月六日(日)正午名古屋山王会館、主催阿部秋子女史。東京秋声会本部会長前田秋声師を始め阿部門下数人のほか、京都牧南水、福井西川磯水、岸本港水、小竹氏、名古屋奥村慧水、谷津壮水の各氏を来賓に迎え、はじめて人前での演奏という初心者などを序奏に全参加者の熱演が夕刻まで続いたあと酒宴に移り、素人とは思えぬような美事な隠し芸なども披露されて興を添えた。参加者は総勢二十五人。

京都琵琶協会の七月例会

七月二十日(日)昼一時本部平井会長宅。本日は病気や事故のため欠席者多く、平井春嶺、水内媛水、牧南水、山岡旭清、安住旭康、梅原旭濤、田中歌水、林旭朔、馬場鴨水の各会員が席をつらね、数氏研修演奏のあと七月二十三日祇園祭り献奏会その他の協議をして夕食を共にし、七時散会した。

日本芸術琵琶普絃会七月例会

七月二十日(日)昼一時東京文京区大塚の貸席京屋。山崎錦幽氏のお江戸日本橋、門琵琶、伴流謡切第六弾法を序奏に城山ー内田隆章▼白虎隊ー杉山富士子▼毒饅頭ー鈴木好水▼詩吟二題ー奈佐喜八▼青の洞門ー広瀬武夫▼安宅の関ー杉本旭童▼血風桶狭間ー松本蕾水▼月に偲ぶー丸田弾琴▼関ケ原ー金森旭弾▼乃木将軍ー坂入晴峰▼坂崎出羽守ー青木早水▼厳流島ー長谷川錦舟▼二〇三高地ー若宮旭登▼横笛ー高田栄水▼伊豆の御難ー杉山旗水。以上研修演奏のあと小宴、七時散会した。

祇園祭協賛琵琶献奏会

東京神田祭、大阪天神祭とともに日本三大祭の随一といわれる京都祇園祭は本年も七月十七日盛大に行われたが、その後の祭りの同月二十三日(水)午後四時半から祇園八坂神社能楽堂で京都琵琶協会の協賛による各流派琵琶献奏会が華々しく開催された。この献奏会は毎年この日に開かれ今年は実に二十五回目で、会場前には天幕を張り数十の腰掛けをしつらえて多数の琵琶愛好来聴者は勿論、一般参拝者や円山公園など広い境内を散策する大勢の人々にも琵琶の心随を味あわせるために拡声機を備えつけるなど万全を期した。

当日は梅雨明けの雷雨が夕刻から約四十分間にわたり激しくなり、初夏の暑熱を吹き飛ばして涼風を送り込んだが、献奏者は烈しい雷鳴を物ともせず熱演を続け、また折から滞京中の東京の錦心流大家前田秋声師に臨時出演を願い名曲を献奏して頂いたのは望外の喜びであった。七時半終演。（献奏者と曲目ー抽籤出演順）岡本旭村ー坂本竜馬▼山岡旭清ー石童丸▼楊嶽水ー黒田武士▼桜井旭冨ー都落ち▼牧南水ー湖水乗切▼梅原旭濤ー若き敦盛▼矢吹旭美津ー菅公▼田中歌水ー戦艦大和▼木下皇水ー新撰組▼平井春嶺ー本能寺▼静ー前田秋声。

京都琵琶協会の納涼懇親会

七月二十三日祇園祭り八坂神社奉納演奏会終了後一同打ち揃って、懇親会場京都四条東華菜館の鴨川床（ゆか）に趣いた。

鴨川床は京都夏の名物で、街の中心を流れる鴨川の瀬々らぎの上に床を設けてぼんぼりをつけ、そよ吹く涼風を満喫しながら京料理でビールの満を引くという趣向であるが、当夜は相憎くの雨で、やむなく屋内の座敷に席を移して懇親の宴を張り、芸談などに花を咲かせて九時半なごやかに散会した。

（出席者）馬場鴨水、林旭朔、楊嶽水、田中歌水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、木下皇水、水内媛水、平井春嶺、同夫人。来賓前田秋声師、同（故）伊吹正陽氏夫人、同（故）古谷竟水氏夫人。

大阪安井天満宮の琵琶献奏会

七月二十五日(金)朝十時、大阪琵琶同好会協賛、夕五時終演。河内の宿ー入江▼城山ー西川▼敦盛ー朽木▼白虎隊ー矢野旭信▼松の廊下ー高橋旭春▼菊水の旗ー米原旭女▼曽我兄弟ー島津旭清▼本能寺ー辻旭城▼五條の橋ー作花旭友▼かぐや姫ー別所、青柳、鈴木▼川中島ー田中歌水▼菅公ー石橋旭嶺▼井伊大老ー中山鳳水▼二〇三高地ー天津八千代。外に扇舞、剣舞、日舞など数番。

日本琵琶悠絃会七月例会

七月二十七日(日)昼一時東京都中野区大和町センター。門琵琶、伴流謡切第五弾法ー茂良、錦幽▼送別ー伊藤茂良▼利休の最期ー山崎錦幽▼檜山節考ー木村松詠▼詩吟城山ー天羽岳水▼薄陽江ー八束一峰▼詩吟新撰組ー伴旭友▼彰義隊ー清水源城▼常陸丸ー金森洲丈▼桜ー仲川秀邦▼井伊大老ー中村洲心▼歓進帳ー長谷川錦舟▼鉢の木ー軽部岳瑞▼城山ー鈴木鶴謳。以上研修演奏のあと小宴、六時散会した。尚来賓として大和田鶴道氏が臨席された。

筑前琵琶合同演奏会

八月三日(日)午前十時半京都安井金比羅宮会館、共催京都琵琶三美会（会長菅旭香女史）。四才、五才の幼児から小・中・高校生ら男女十二人を含む中、高齢者が一団となって得意の曲をそれぞれ熱演しヤンヤの喝采が絶え間なく続いて立錐の余地なき超満員の盛会であった。